

4月15日は笠松春まつりの最終日となり、本町通りから八幡神社にかけて、多くの人々で賑わいました。

そこで、笠松春まつりの元となった「笠松祭り」の伝承の歴史について調べてみました。

〈注〉
大名行列…かつて、笠松には郡代がおり、江戸時代後期に郡代を大名に見立てて奴行列を行ったのが起源と言われています。明治維新後には、笠松祭りの余興として復活し、司町と港町により隔年で奉芸していましたが、担い手が減少したため全町的な保存会が組織され、現在では毎年実施されるようになりました。

笠松祭り…江戸時代には、旧暦の8月に行われていました。明治時代になっても引き続き秋に行われていましたが、その後、4月の笠松春まつりとして行われるようになりました。

山車(軸)…川湊として笠松が商業で栄えていたころ、8つの町内が山車をもち、奉芸していました。その後、踊り手の不足などから山車の数は徐々に減り、現在では下本町が3年ごとに奉芸しています。

神輿…笠松地区の各町内会には、本神輿と呼ばれる立派な神輿がありました。神輿の数は少なくなりつつありますが、祭りの伝統を繋ぐため、現在では花神輿を作って担いでいる町内会が多くあります。

保存会や各町内会などが中心となって受け継いできたこれらの伝統を絶やすことのないよう、町民みんなで考え、町内会ごとの横の繋がりも広げていきたいものです。

〈注〉郡代とは、江戸時代、笠松に陣屋が置かれた際に幕府から派遣された役人のことを言う。



大名行列の一場面

お馬さまのおとしもの②

かさまつの民話「昔むかし」

二年生の義吉には、片手でさみへ入れるのはむりだった。とうとう鼻をつまんでいた

左手も熊手にかけた。まだやわらかい馬糞は、くさみの中へ静かにころげこんだ。

さあ、これからが大変。馬糞の中へ少しでも砂や小石をいれてはいけなかった。

「にいちゃん。今度はにいちゃんやって！」
 兄は仕方なく熊手を受けとった。

そして馬糞のまわりにある小石や砂をのけた。熊手を使わないで棒切れを両手に持ち、馬糞をはさんで、ぼいぼいとくさみの中へいれていった。少しづつしかはさめないの時間がかかった。

あわてる道砂の上にはぼとりと落ちてしまうのだ。落してしまうとなかなか終わらない。彦作は慎重に構えて、

かさまつの民話「昔むかし」は昭和54年に発行されました。笠松中央公民館・松枝公民館・総合会館でご覧いただけます。

にぎりこぶしよりも小さくなった馬糞をていねいにくさみの中へいれていった。

だんだん馬糞は少なくなり、下のほうになると小石がまじっていた。棒で小石をよけては、馬糞をはさんでくさみの中へいれるのだ。

彦作は父に初めてついできた馬糞拾いのことをふと思いついた。父は熊手でびゅんびゅんと左手に持っているくさみの中へ馬糞をいれていった。彦作は父の手にある熊手がまるで生きもののように軽く動くのがおもしろかった。それで、「ぼくにもやらして。」(つづく)

〈注〉くさみとは、この地方の方言で、穀物の選別や運搬に使う農具「箕」のことを言う。

